

浜松医科大学第二外科学教室

Second Department of Surgery,
Hamamatsu University School of Medicine

浜松医科大学第二外科学教室は、1976年、初代阪口周吉教授のもとに開講し、1990年、第二代馬場正三教授に引き継がれて現在に至っている。

1996年現在、教室構成員は、教授1名、助教授1名、講師2名、助手6名、医員11名、研究生1名、大学院生6名の総勢29名からなっている。海外からの留学生も多く、バングラデシュ、トルコ、エジプト、コスタリカ、中国と国際色豊かである。同門会員は118名であり、消化器外科医あるいは血管外科医としてそれぞれ各分野で活躍中である。

診療 一般消化器外科（食道、胃、小腸、大腸、肝、胆、膵）と血管外科を専門としている。治療方針としては、疾患の根治性ととともに、患者の quality of life（生活の質）を第一に考え、常に積極的に新しい方法を開発あるいは取り入れている。また、消化器癌に対しては、血管外科との協力による拡大手術や、癌の生物学的特性に基づく縮小手術の選択を行い、それぞれの患者に適した、必要かつ十分な個別化した手術を行うように努力している。

研究 教室には、① 上部消化管グループ、② 下部消化管グループ、③ 肝・胆・膵グループ、④ 血管グループの臓器別の4つの研究班がある。教室の総合的なテーマとしては、“癌の病態に基づく新しい診断・治療法の開発”と“多臓器障害（MOF）の病態の研究とその予防”があり、教職員全員で取り組んでいる。特に癌では、遺伝子、増殖因子、サイトカインなどの解析により、癌の生物学的特性を研究し、手術法の個別化に役立っている。特に、遺伝性大腸癌では、より良い発症前診断法の開発や家系追跡による genotype-phenotype の解析を行い、正しい手術適応の決定の研究を行っている。また、癌の浸潤・転移機構の解明に力を注ぎ、血管新生阻害物質などを用いた新しい治療法の開発を行っている。MOFでは、トノメータを開発し組織酸素濃度の面より、その予知と予防を目的に研究している。

教育 教室員には、7年間の卒後研修期間を設け、臨床・研究の指導を行い、関連学会の認定医・専門医の修得および学位の修得を義務づけている。現在、3名海外留学中であり、Harvard 大学外科に2名、Pennsylvania 大学に1名、Research Fellowとして研究中である。

（文責 中村稜志）